

大分県現代俳句協会句会報 第18号

令和4年5月31日発行

【令和4年 第1回雑詠句会結果&第2回雑詠句会選句号】

第一回雑詠句会結果発表（選句&選評）

25点 逝きし子の歯ブラシ乾く半夏生

河野 則子

《9点句》

幸せのところどころに石路の花
答えない問いばかりして水凍る
石路の群れるあたりで母を待つ
冬すみれ生涯産土しか知らず
湯豆腐をつつきこのごろ人嫌い
手袋を外してきみと手をつなぐ

神 慶子
坂本 一光
小野みち子
西峯 峰子
上田たかし
佐藤 珠幸

《8点句》

みどり児の両手がかむ寒の空
錆びてなお昭和を語る斧始め
着ぶくれて他人の顔になつて
ポインセチアのまっ赤な嘘を見抜けない
落葉掃き一葉一葉の声を聞く
春眠を黄泉の寢床にして逝きぬ
ふるさとの村は枯野に天の風

足立 攝
甲斐加代子
上田たかし
本田 圭子
足立 鶴男
河野 則子
御手洗豊海

《7点句》

今日を泣き今日を笑って晦日蕎麦
兜太かなおいと顔出す春の山
噓してうわさの中にある私
山眠るコペルニクスのでのひらで
すんなりと言葉出てこずおでん煮る
寒夕焼波の向こうは戦の火
片言の会話の弾むお年玉
人生は算数ですねお月さん
南瓜煮る母の背中の豊かなる

嶋末 洋子
有村 王志
西峯 峰子
平田千代子
早澤まり子
白土 正江
時松由美子
甲斐 順子
菅 登貴子

20点 木枯しが隙間だらけの村抜ける

谷川 彰啓

14点 アクセルをぐいと踏込み冬に入る

陣野千恵子

13点 いぬふぐり待つて父の田手放せり

足立 町子

12点 虎落笛平和のきしむ音かしら

白土 正江

12点 廃校に金次郎ある春休み

森山 秀子

11点 円周率みたいにく続蟻の列

岸本千鶴子

10点 帰省子とひらがなのような日が過ぎる

灘波 瑞枝

10点 れんげ田に座れば昭和香りくる

立麻 琴路

10点 嘘をつく夜は冷たき膝頭

松廣 李子

《6点句》

自分史を留じ込めながら恵方巻
 日だまりににんまりと在り冬すみれ
 倦怠のかたち割れる鏡餅
 すかんぼや昭和すっぱし今も尚
 音も無く皆で右向く枯れ尾花

甲斐加代子
 赤峰佐代子
 足立 攝
 岸本千鶴子
 岡村 君香

《5点句》

春キヤベツもうすぐ羽化が始まり
 寒林檎独り居の部屋明るうす
 有り体に生きて蟻螂枯れゆけり
 六郷の仏うとうと菜種梅雨
 生と死のリズムとこしえ花吹雪
 突きぬけた壁の向こうや大旦那
 アフガンの一隅照らす冬の月
 海に出て葬列につく鰯雲
 蒲の穂の揺れてかすかな偏頭痛
 冬の田にヒッチョクカカラス舞う
 迎え火を揺らして帰る茄子の馬

足立 攝
 白土 正江
 田中 充
 福田 英子
 立麻 琴路
 赤峰佐代子
 田中 充
 河野 泉
 平田千代子
 井上 則子
 河野 則子

《4点句》

過ちを赦すがごとく鹿啼けり
 逝く秋を追いかけていく一人旅
 春を着るヘルパーさんの身の軽さ
 きさらぎの峡は傾きつつ明け
 開戦日百三歳の記憶聞く
 海鼠腸のこの呼び方が私好き
 大根やまあるく擦ればまるい味
 老二人冬の一樹の象かな
 埋火のその哀切を友とする
 冬空を押し上げ隣家の棟上る
 土つきの大根提げて立ち話

東 香代子
 早澤まり子
 加藤 征孝
 上田たかし
 佐々木 玉
 東 香代子
 安森 範明
 有村 王志
 小野みち子
 鎌倉真由美
 東 香代子

指切りのあの頃いくつ桜貝
 手袋をはめて気がつく右左
 永ふや幾千萬の踏絵して
 夕暮れの棚田放棄地芒揺れ

田代 直之
 衛藤 俊一
 福田 英子
 竹下美津子

《3点句》

菰卷や大樹に二人抱きついて
 つま立ちて孫見送りぬ秋の暮
 炬燵の火消せど動かぬ猫の意地
 春連峰電柱いっぽん飮する
 日向ぼこする野良猫の倦怠期
 とがった目の少年手袋に穴
 財布から寒くなりたる老年期
 火の心いだけ続けている氷

長谷川正伸
 立麻 琴路
 本田 圭子
 河野 泉
 平田千代子
 鎌倉真由美
 足立 鶴男
 坂本 一光

足元の幸わせここにも桜草
 足音は皆それぞれに枯野道
 干し柿の具合を探る指の先
 着膨れて中はとろりといい女
 明日逢えるかすかな予感冬董
 小春日の布団取り込む腕軽し
 漂泊の吾がゆく道は枯母郷
 大いなる虹に包まれ息ひとつ
 長いものに巻かれてたまるか春の雷
 掌の中の愁いはひとつ柿日和
 四極山小猿を抱き山眠る
 老ひという魔物に対峙秋の暮
 生きている命の限り冬の蝶
 冬芒よもつひらさか徒歩ななほ

灘波 瑞枝
 赤嶺 信子
 陣野千恵子
 陣野千恵子
 吉田 素子
 竹下美津子
 谷川 彰啓
 菅 登貴子
 菅 秀子
 菅 攝子
 井元 扇岳
 畑 正彦
 御手洗豊海
 松廣 李子

第一回雑詠句会作品集(点盛)

- 1 ③ 菰卷や大樹に二人抱きついて 長谷川正伸
- 2 ② ばかヒタキ馬鹿こそよけれ寄添える 長谷川正伸
- 3 石ひとつ鴨一羽づつ日を迎ゆ 長谷川正伸
- 4 ① 悴む手まらずは新聞俳句欄 原田 勝子
- 5 ② 木守柿感謝のしるし十個ほど 原田 勝子
- 6 悔しいわ齢と賀状の反比例 原田 勝子
- 7 ⑤ 春キヤベツもうすぐ羽化が始まり 足立 攝
- 8 ⑥ 倦怠のかたちに割れる鏡餅 足立 攝
- 9 ⑧ みどり児の両手がかむ寒の空 足立 攝
- 10 ⑨ 幸せのところでころに石露の花 神 慶子
- 11 ② ラ・メールと言う名のカフェ冬鷗 神 慶子
- 12 ① ラジオから昭和の演歌山眠る 神 慶子
- 13 ⑨ 答えない問いばかりして水凍る 坂本 一光
- 14 ③ 火の心いだけ続けている氷 坂本 一光
- 15 ② 野ぶどうの朽ちたる青を手に取り 坂本 一光
- 16 ③ つま立ちて孫見送りぬ秋の暮 立麻 琴路
- 17 ⑩ れんげ田に座れば昭和香りくる 立麻 琴路
- 18 ⑤ 生と死のリズムとこしえ花吹雪 立麻 琴路
- 19 ⑦ 今日を泣き今日を笑って晦日蕎麦 嶋末 洋子
- 20 ② 寒声や海に向かえば父がいる 嶋末 洋子
- 21 去年今年笑いの絶えぬ文殊かな 嶋末 洋子
- 22 ④ 過ちを赦すがごとく鹿啼けり 東 香代子
- 23 ④ 海鼠腸のこの呼び方が私好き 東 香代子
- 24 ④ 土つきの大根提げて立ち話 東 香代子
- 25 ① 列島に安保と九条北塞ぐ 下司 正昭
- 26 ① クリスマス祈る背後にミサイルが 下司 正昭
- 27 語り継げ戦火の惨状開戦日 下司 正昭
- 28 ④ 逝く秋を追いかけていく一人旅 早澤まり子
- 29 ② もう母を許すと決めた日の薄 早澤まり子

- 30 ⑦すんなりと言葉出てこずおでん煮る 早澤まり子
- 31 ⑩帰省子とひらがなのような日が過ぎる 灘波 瑞枝
- 32 ③足元の幸わせここにも桜草 灘波 瑞枝
- 33 ①田を守る使命一筋草を抜く 灘波 瑞枝
- 34 ④春を着るヘルパーさんの身の軽さ 加藤 征孝
- 35 又死かよトラクターの運転手 加藤 征孝
- 36 ①いちだんときこえないのか春のみみ 加藤 征孝
- 37 ②正月やよそ行の服着せられて 安森 範明
- 38 ④大根やまあるく擦ればまるい味 安森 範明
- 39 ①春隣り相田みつをの言葉かな 安森 範明
- 40 ①蘆の角河川工事の轍あと 田代 直之
- 41 ②春めくや母のもんぺに上つ張り 田代 直之
- 42 ④指切りのあの頃いくつ桜貝 田代 直之
- 43 ⑦兜太かなおいと顔出す春の山 有村 王志
- 44 ④老二人冬の一樹の象かな 有村 王志
- 45 ①まつすくな木ばかり数える寒という 有村 王志
- 46 短日に急かされ畑の早仕舞 赤嶺 信子
- 47 ③足音は皆それぞれに枯野道 赤嶺 信子
- 48 米をとぐメニューもやがて冬至かな 赤嶺 信子
- 49 ⑥自分史を留め込めながら恵方巻 甲斐加代子
- 50 ①雪解けの峽は迎える米寿かな 甲斐加代子
- 51 ⑧錆びてなお昭和を語る斧始め 甲斐加代子
- 52 ⑥日だまりににんまりと在り冬すみれ 赤峰佐代子
- 53 ②蓄えた色は何色冬木立 赤峰佐代子
- 54 ⑤突きぬけた壁の向こうや大旦那 赤峰佐代子
- 55 ④きさらぎの峽は傾きつつ明ける 上田たかし
- 56 ⑨湯豆腐をつつきこのごろ人嫌い 上田たかし
- 57 ⑧着ぶくれて他人の顔になつて 上田たかし
- 58 ⑤寒林檎独り居の部屋明るうす 白土 正江
- 59 ⑫虎落笛平和のきしむ音かしら 白土 正江
- 60 ⑦寒夕焼波の向こうは戦の火 白土 正江
- 61 ⑭アクセルをぐいと踏み込み冬に入る 陣野千恵子
- 62 ③干し柿の具合を探る指の先 陣野千恵子
- 63 ③着膨れて中はとろりといひ女 陣野千恵子
- 64 ①祭りくる短日だからと自治会長 児玉 利子
- 65 お出かけ日マフラー手袋同じ色 児玉 利子
- 66 ①手袋が用途別にて先進国 児玉 利子
- 67 ②納豆の糸もてあます雪の朝 時松由美子
- 68 ②結ばれしみくじの花や風に咲く 時松由美子
- 69 ⑦片言の会話の弾むお年玉 時松由美子
- 70 ③炬燵の火消せど動かぬ猫の意地 本田 圭子
- 71 ①野菊一枝挿して鎮もる猫の墓 本田 圭子
- 72 ⑧ポインセチアのまつ赤な嘘を見抜けない 本田 圭子
- 73 大寒や我慢がまんの寿司を喰む 幸谷 恵子
- 74 ①高階に鬼も来ぬなり鬼は外 幸谷 恵子
- 75 ②希望とはすがるものなり涅槃西風 幸谷 恵子
- 76 ⑤有り体に生きて蟻螂枯れゆけり 田中 充
- 77 ①蹉跎なお記憶の澱に悴めり 田中 充
- 78 ⑤アフガンの一隅照らす冬の月 田中 充
- 79 ⑨石路の群れるあたりで母を待つ 小野みち子
- 80 ④埋火のその哀切を友とする 小野みち子
- 81 ②霜焼けの我が手姉の手炊事の手 小野みち子
- 82 ①カーテンを閉め短日の筆進む 衛藤 俊一
- 83 短日や家路に向かう笑い声 衛藤 俊一
- 84 ④手袋をはめて気がつく右左 衛藤 俊一
- 85 ⑨冬すみれ生涯産土しか知らず 西峯 峰子
- 86 ⑦噓してうわさの中にある私 西峯 峰子
- 87 ①狐火のただよふはわが妬心かな 西峯 峰子
- 88 ③春連峰電柱いっぽん銜する 河野 泉
- 89 ①月光の冬木のなかの母眠らず 河野 泉
- 90 ⑤海に出て葬列につく鰯雲 河野 泉
- 91 ①ことば尻つままれている日短 吉田 素子
- 92 ①ライン機器駆使する僧ら十夜寺 吉田 素子
- 93 ③明日逢えるかすかな予感冬董 吉田 素子
- 94 ③日向ぼこする野良猫の倦怠期 平田千代子
- 95 ⑦山眠るコペルニクスのてのひらで 平田千代子
- 96 ⑤蒲の穂の揺れてかすかな偏頭痛 平田千代子
- 97 満ち欠けは世の理コロナも冬の月 谷本 親史
- 98 ①日を追えば地震の怖れ遠霞 谷本 親史
- 99 望みまだおぼろに揺れる春隣 谷本 親史
- 100 ①枯野には九尾狐が住むという 佐藤 珠幸
- 101 ⑨手袋を外してきみと手をつなぐ 佐藤 珠幸
- 102 ②廃村に打ちひしがれた枯野かな 佐藤 珠幸
- 103 ②水の星あちらこちらで水温む 岸本千鶴子
- 104 ⑥すかんぼや昭和すっぱし今も尚 岸本千鶴子
- 105 ⑪円周率みたいにく続く蟻の列 岸本千鶴子
- 106 ①もういいかいはいもういい上落の臺 福田 英子
- 107 ⑤六郷の仏うとうと菜種梅雨 福田 英子
- 108 ④永ふや幾千萬の踏絵して 福田 英子
- 109 ⑬いぬふぐり待って父の田手放せり 足立 町子
- 110 ②春月や草屋に母の丸き椅子 足立 町子
- 111 ニッポンの人流老いて鳥帰る 足立 町子
- 112 短日の週間予定やりくりす 佐藤 哲夫
- 113 ①オミクロン完封するや冬至風呂 佐藤 哲夫
- 114 左手の手袋命ナイスオン 佐藤 哲夫
- 115 太平洋戦争歴史の学び枯野道 福田スミ子
- 116 ①寒菊のまがりし枝は老いの味 福田スミ子
- 117 倒れたる皇帝ダリアに冬の蜂 福田スミ子
- 118 ③とがった目の少年手袋に穴 鎌倉真由美
- 119 ④冬空を押し上げ隣家の棟上る 鎌倉真由美
- 120 ②短日やコロッケ売り切れの貼り紙 鎌倉真由美
- 121 ②弟を見舞う四人へ冬日射す 飯田 幸子
- 122 ②冬晴れに最後の笑顔撮り終える 飯田 幸子

- 123 ① 今日限り別れる石露の花ざかり 飯田 幸子
 124 ③ 財布から寒くなりたる老年期 足立 鶴男
 125 ② 寒風に離農の友が語りだす 足立 鶴男
 126 ⑧ 落葉掃き一葉一葉の声を聞く 足立 鶴男
 127 ④ 開戦日百三歳の記憶聞く 佐々木 玉
 128 猫の背に注射針刺す冷たさよ 佐々木 玉
 129 短日の斜陽引つ張る釣りマニア 佐々木 玉
 130 ① 残り香やシートに二本木の葉髪 岡村 君香
 131 ⑥ 音も無く皆で右向く枯れ尾花 岡村 君香
 132 ① 冬麗の久住高原風立ちぬ 岡村 君香
 133 鮮魚台霜降りカマス狙ひおり 林 香澄
 134 ② 秋バラやアリス招きてお茶にする 林 香澄
 135 ① 予後ならば会話がみ合ふ秋夜長 林 香澄
 136 世界中敵戒体制オミクロン 井元 扇岳
 137 牡丹愛で経読むような尼僧さま 井元 扇岳
 138 四極山小猿を抱き山眠る 井元 扇岳
 139 トラ年の父生きたれば一〇八歳 大神 愛子
 140 ① 春来れば後期高齢仲間入り 大神 愛子
 141 今年こそ家族七人旅したい 大神 愛子
 142 友からの荷亡母の荷に似て秋いっぱい 倉迫 順子
 143 ① 秋天に愚図つく心解放す 倉迫 順子
 144 ② 秋夕焼今在る幸に手を合わせ 倉迫 順子
 145 埋めつくす今朝の小道の濡落葉 井上 則子
 146 ① 十一の宝の笑顔去年今年 井上 則子
 147 ⑤ 冬の田にヒッチコックかカラス舞う 井上 則子
 148 ③ 小春日の布団取り込む腕軽し 竹下美津子
 149 ④ 夕暮れの棚田放棄地芒揺れ 竹下美津子
 150 先取りのお洒落のブーツ秋暑し 竹下美津子
 151 ① 海小春厄介ものの軽い石 畑 正彦
 152 ① 散り初むる金木屋や陣屋跡 畑 正彦
 153 ③ 老ひという魔物に對峙秋の暮 畑 正彦

- 154 ① 見得を切る歌舞伎役者の菊人形 永松左世美
 155 冬めきし川原に鶯の声渡る 永松左世美
 156 ② 上弦の月に誘われ珍珠に入る 永松左世美
 157 ① 時惜しむ晴耕雨読おちばはき 御手洗豊海
 158 ⑧ ふるさとの村は枯野に天の風 御手洗豊海
 159 ③ 生きている命の限り冬の蝶 御手洗豊海
 160 河辺には緋鯉の姿今朝二匹 安田 文
 161 ② 父の亡き部屋に尺八律の風 安田 文
 162 雲遙か夫背をまるく野老掘る 安田 文
 163 ⑧ 春眠を黄泉の寢床にして逝きぬ 河野 則子
 164 ② 逝きし子の歯フラシ乾く半夏生 河野 則子
 165 ⑤ 迎え火を揺らして帰る茄子の馬 河野 則子
 166 ① 空高くそういえば秋開放感 あべまさる
 167 ② ただ窓に雲見て暮らす秋の午後 あべまさる
 168 ① グータッチ今年秋の流行語 あべまさる
 169 ⑦ 人生は算数ですねお月さん 甲斐 順子
 170 ようやつと庭に出番の菊香る 甲斐 順子
 171 秋茄子の至福色なり句友仲間 甲斐 順子
 172 大根を抜きて白さよ有難う 河野 輝暉
 173 ② 青葉騒をまだ吐き出して止き子の口 河野 輝暉

第一回 雑詠句会選 & 選評 ◆ 順不同 ◆

陣野千恵子 選

≪7・10・15・31・58・95・107・148・163・164≫
 7 春キャベツもうすぐ羽化が始まり

(足立 攝)

上五の春キャベツで柔らかな春の陽射しやパステルカラーの空気が辺りに拡がって、なんだかワクワクするようないいことがありそうなのがしてきました。中七のもうすぐと始まりがこの句をリズムカルにしています。希望が

早澤まり子 選

≪38・49・51・52・102・116・121・144・164・177≫
 116 寒菊のまがりし枝は老いの味

(福田スミ子)

普通、菊はまっすぐ育てようと思うところ、人生の紆余曲折を経て来た方には大切な菊だと思えます。でも、曲がってしまった枝は、それ

湧いてくる軽やかな句で、とてもいいです。

- 174 ② 虫時雨亡き子の無言のやかましき 河野 輝暉
 175 ① 手袋を脱げば老いたる指と甲 森山 秀子
 176 ③ 長いものに巻かれてたまるか春の雷 森山 秀子
 177 ⑫ 廃校に金次郎ある春休み 森山 秀子
 178 ③ 漂泊の吾がゆく道は枯母郷 谷川 彰啓
 179 ⑩ 木枯しが隙間だらけの村抜ける 谷川 彰啓
 180 ② 冬花火老いてゆく日々照らし出す 谷川 彰啓
 181 ③ 大いなる虹に包まれ息ひとつ 菅 登貴子
 182 ② 休刊日手持ちぶさたの秋の空 菅 登貴子
 183 ⑦ 南瓜煮る母の背中の豊かなる 菅 登貴子
 184 ② 春茶漬け女の本音匂わせて 菅 攝子
 185 ③ 掌の中の愁いはひとつ柿日和 菅 攝子
 186 生も死も日のささげたる菊の酒 菅 攝子
 187 ① まんじゅしやげ三味線抱いて瞽女二人 菅 攝子
 188 パラマラの伴に走りし愛の紐 宮川三保子
 189 ② 産卵の鮭や命をつなぎ果つ 宮川三保子
 190 ② 菊月夜あはず母の手すきとほる 松廣 李子
 191 ⑩ 嘘をつく夜は冷たき膝頭 松廣 李子
 192 ③ 冬世よもつひらさか徒歩ななほ 松廣 李子

なりに人生の良い味が出ていると思います。そこに目を向けた作句者の感性のすばらしさに敬服します。

平田千代子 選

《9・24・52・70・84・110・121・158・165・184》

心配りを感じました。

吉田 素子 選

《9・44・58・78・90・104・119・152・163・179》

足立 鶴男 選

《19・30・61・94・98・105・113・159・168・179》

田代 直之 選

《13・43・47・51・59・105・127・158・164・179》

足立 攝 選

《10・14・20・45・57・81・86・164・174・182》

嶋末 洋子 選

《15・22・29・70・76・125・126》

有村 王志 選

《13・23・54・56・78・86・88・120・126・131》

5 答えのない問いばかりして水凍る

(坂本 一光)

菅 登貴子 選

《14・22・31・67・79・85・109・134・164・177》

幸谷 恵子 選

《24・25・60・61・90・101・107・177・179》

90 海に出て葬列につく翳雲

(河野 泉)

菅 攝子 選

《31・38・42・51・68・85・90・164・169・191》

「答えのない問い」には様々な想いが輻輳する。過去・未来を含めて、現在地での想い。自問自答するその沈黙の深さを覚える句。下五の水の凍った映像がまた、鮮明で鋭い感性のもと、人生の何かはるか望郷のごとき一瞬を切り取ってもいる。

永松左世美 選

《38・42・59・61・72・85・101・105・146・190》

林 香澄 選

《7・13・54・59・79・101・103・147・169・180》

7 春キャベツもうすぐ羽化が始まり

(足立 攝)

野上 眞司 選

《5・40・51・53・55・80・100・149・177・179》

立麻 琴路 選

《31・50・60・88・96・107・123・164・179・191》

勢いあまって成長のバランスが少し崩れるのか、春キャベツって確かにそう、羽化の様に巻いてます。命が育つ時どこか似るんでしょうか。これを羽化と見える涼しい眼がほしいです。

赤嶺 信子 選

《8・61・63・79・93・109・156・177・179》

上弦の月に誘われ玖珠に入る

(永松左世美)

連日テレビ等でウクライナの惨状を見て心がふるえて居ます。作者は淡い束の間の寒夕焼をみてこの波の向こうのウクライナ侵攻の戦火に不安と恐怖を感じたのでしょうか。よい句と思いましたが。一刻も早い平和が訪れますよう願うばかりです。

菅 勲 選

《9・17・28・49・60・85・126・159・177・187》

126 落葉掃き一葉一葉の声を聞く

(足立 鶴男)

油布 晃 選

《1・10・75・101・126・138・176》

一年の実りを次世代に託し、秋の風にカラカラと音を立てて散る落葉と、それを掃く作者の

くつきりと景色が見えてきます。月の色が真暗な玖珠の町と対比し、静けささえ感じられます。満月ではなく上弦の月としたところにより魅力を感じます。玖珠に入るも長距離運転をしてやっと到着したか、旅の途中が玖珠なのかいろいろ想像され物語が生まれてきます。色・音・動き・時間・場所のすべてが17音で言い尽く

され感動しました。

安田 文選

《19・23・32・42・59・69・124・149・175・189》
19 今日を泣き今日を笑って晦日蕎麦

(嶋末 洋子)

皆、悲しかったり、嬉しかったり、の繰り返し。泣いたり笑ったりの日々、今日は晦日、幸せを感じながら、お蕎麦を食べている姿、目に浮びました。

上田たかし 選

《13・20・39・43・59・95・118・165・173・177》
20 寒声や海に向かえば父がいる

(嶋末 洋子)

寒声に導かれて海に向う。そこには亡き父が居る。さまざまな問題が生じる度に、解決の糸口を求めては、その場に立って考える。情に流されることなく、物事を冷静に処理してゆく作者の姿が見えるようで惹かれた。

白土 正江 選

《7・8・30・96・104・109・122・164・179・191》
30 すんなりと言葉出てこずおでん煮る

(早澤まり子)

最近「私」は言葉が出てこず認知症の初期と診断された。でも生活は普通に送っている。今も友人達が来ておでんを囲んで賑やかに喋ったりしているが「私」は言葉が出てくくすぐに返事ができないので黙っている。そしておでんの補充やみんなのお世話をしている。「あー、私も話の中に入って喋りたいのに……」一人

の女性の哀しみが「おでん煮る」にこめられていると感した。

本田 圭子 選

《11・24・55・58・96・101・148・183・191》

谷本 親史 選

《18・51・55・85・108・109・122・147・161・164》
109 いぬふぐり待つて父の田手放せり

(足立 町子)

イヌフグリは春に淡紅色の花をつける。幼い時から馴染み親しんだ可憐な花の咲くのを待つて、土の命が花開く季節に耕作不能の田を手から放す。齢を含む深情の吟。

フグリは陰囊の古語。勿論句意とは関係はない。しかし、なぜか父子相伝の田と訣別する句意の極に深く胸を打たれる。終語の「り」がすべてを物語る。

神 慶子 選

《22・31・43・56・60・76・80・94・161・179》

安森 範明 選

《4・16・30・69・79・92・119・163・167・183》
92 ライン機器駆使する僧ら十夜寺

パソコン、スマホのオンラインの時代である。十夜は主として浄土宗の寺院で行われる十日十夜の念仏法要とある。大きな寺であろう、ライン機器の扱い等、最も遅れていると思っていた寺が、今や会社等にも負けない程、自由自在に使っていることに驚いた。取り合わせの意外性が、良かった。

甲斐加代子 選

《8・54・59・61・69・85・164・179・180・184》

児玉 利子 選

《2・13・17・32・37・52・76・164・166・169》

坂本 一光 選

《57・63・84・95・103・105・109・131・169・183》
109 いぬふぐり待つて父の田手放せり

(足立 町子)

父が精魂込めて米を作った田をとうとう手放すときが来た。いぬふぐりの咲くのを待つてからにしたというせめてもの思い。

一粒の米を捨てた田も捨てる……一体どれだけの田が手放され、あるいは打ち捨てられてきたか。事情はさまざまであろうが、一句に日本の農業の流転をも思う。

河野 輝暉 選

《10・57・79・85・86・164・169・177・185・191》
10 幸せのところどころに石路の花

(神 慶子)

「幸福論」は古今東西で論じられ、人それぞれであり、キリの無い抽象的なものである。対して「不幸」の方は有形で目に見える。普段、人は不幸について意識しない。なのに掲句は「幸せ」をテーマにした。それこそ作句の芸術的気付きに端を発している。中七は、幸福に関して如何に感じる事が少ないかを表出している。換句すれば「ときにしか花石路灯らぬ不倖せ」と言えなくはなく、選句は換句のオキシロモンとも解釈でき平明深奥の秀句。

大神 愛子 選

《17・28・62・81・89・131・157・158・164・183》
164 逝きし子の歯ブラシ乾く半夏生
(河野 則子)

幼なき日に、それとも親より早く若死にしたのか、胸が痛む句でした。歯ブラシが乾く、それまで使っていた子供の生存が、伝わってききました。でも今は乾くにすべての心が痛々しく伝わる句でした。

足立 町子 選

《7・37・57・61・79・101・134・164・177・183》
37 正月やよそ行の服着せられて
(安森 範明)

子どもはみんなそうであるが、それでは下五の「着せられて」という受け身形が理解できない。やはりこの作品は、大人の、多分高齢者の心情なのだ。老健施設はもちろんであるし、家庭内でも同様だろう。「はいはい、おじいちゃんはこれね」と、意思や希望を表明する間もなく着替えさせられる。そしてそれが間違いない善意であり、思いやりなのだ。高齢化社会のお正月のひとつまが、過不足なく描かれている。

福田 英子 選

《56・59・76・85・96・104・118・131・163・164》

河野 則子 選

《58・61・62・67・90・101・119・179・191》
62 干し柿の具合を探る指の先
(陣野千恵子)

まだ私が幼い頃、干柿についてひどい目に遭っ

たことを思い出す。母が食べ頃を教えてくださいなかつたものだから、指にまだ固くて澁いものを口にしたのだ。この回想が掲句を共感句として指さしたものと見えよう。「：：探る指の先」とはよく言ったもので、指は頭脳の先端と喩えられる。逆に指を器用に操ることで頭脳は鍛えられ、認知症予防にもなるという。ほろ苦い幼児体験を懐しく思いだしながら甘くなつた干柿を食べている。

宮川三保子 選

《7・19・34・71・72・85・127・163・164・165》
今日を泣き今日を笑つて晦日蕎麦
(嶋末 洋子)

私も高齢になり、若い時より月日の流れを早く感じています。喜怒哀楽、泣いたり笑つたりの日一日をつみ重ねて一年が終わります。晦日蕎麦を食べながら、新しい年も良い年になることを願いつつ家族で迎えるお正月です。共感を覚えた作品でした。

合田 文美 選

《29・30・44・49・118・174・176・181・185・190》
181 大いなる虹に包まれ息ひとつ
(菅 登貴子)

虹を見た時、多くの人は、ときめいたり、心が弾むような気持ちになるのではないでしょう。しかし作者は「息ひとつ」と表現しています。これは、空に広がる虹という雄大な自然を目の前にして畏敬の念を感じたのではないかと思います。人は壮大な自然を目の当たりにすると、自分のことをちっぽけな存在のように感じ

ます。その自然の雄大さと自分の存在の対比が見事に表現されており、ハツとさせられました。

小川 良子 選

《5・18・34・61・82・105・109・132・148・158》
34 春を着るヘルパーさんの身の軽さ
(加藤 征孝)

いかにも身のこなしの軽いヘルパーさんを想像してしまいました。

岡村 君香 様

《10・31・52・61・84・105・119・147・177・179》
31 帰省子とひらがなのような日が過ぎる
(灘波 瑞枝)

夏休みに幼いお孫さんと穏やかに過ごす様子が想像できました。「ひらがなのような」という表現でお孫さんを慈しんでいることが伝わってきました。さらに漢字の”平仮名”ではなく”ひらがな”と表記されていて、より一層柔らかく、幼いお孫さんであろうことが感じられました。微笑ましい時間の経過が感じられ、ほっこりした気持ちになりました。

小野みち子 選

《11・36・52・57・94・101・104・163・179・191》

佐々木 玉 選

《8・14・53・59・66・72・80・95・179・191》
95 山眠るコペルニクスのでのひらで
(平田千代子)

コペルニクスは、ポーランドの天動説から地動説に転回した天文学者。ポーランドは、現在

ウクライナの支援に全力を尽くしています。国名にも触れずコペルニクスと「山眠る」でしっかりと言に今の情勢を詠っているような気がしました。

吾亦紅選

《54・56・57・61・72・95・105・165・169・179》

御手洗豊海選

《9・17・18・41・47・57・105・149・153・179》

牧野桂一選

《8・38・55・59・72・164・191》

164 逝きし子の歯ブラシ乾く半夏生

亡くなった子供のことを思うといつもたつてもいられない。何もかもがむなしくひびき、心の中がからっぽになっていく。しかし、時は無常にも刻々と過ぎまわっていく。それを歯ブラシが眼前で示してくれる。すぐわれない心の事実が「乾く」にとてもよく出ている。

子供が亡くなってからの時間の経過の中で起ったこと、考えたことの全てが半夏生ということばの中に込められている。そして今は、田植えとともに新しい生への転生を望む他ない。

加藤征孝選

《12・13・44・52・57・70・80・102・147・158・179》

70 炬燵の火消せど動かぬ猫の意地

(本田圭子)

朝起きてみると猫と蒲団争いをしてる。なんと蒲団の上に来るのかわからないが、気付くとわがもの顔で蒲団の上に乗っている。何度落ち

ても朝には蒲団の上だ。泣いてる間はいいが又元の位置だ。何度いっても電気毛布の上に来る。おもたくて重たくて何度も落していたら、こんどは自分の寝る位置を考えたのか。暖かくなつたせいもあつてか、毛布との棚の上に寝る位置を変えたようだ。猫との戦いも終えたのだろう。

西峯峰子選

《10・19・22・61・77・78・91・163・178・192》

松廣李子選

《28・56・88・93・96・105・109・138・156・163》

156 上弦の月に誘われ玖珠に入る

(永松左世美)

※選評ではないですが、玖珠をよく知らない者の独り言として、下五の「玖珠に入る」を「日田に入る」にした方が天領日田の三隈川に映る月も見えそうですが。

灘波瑞枝選

《10・19・79・144・149・158・164・165・178・179》

福井トミ子選

《158・164・183》

164 逝きし子の歯ブラシ乾く半夏生

(河野則子)

旅立ててから、忘れることの出来ない親心。親より先に逝ってしまった子供への不憫さ、諦めはとづくについているはづなのに、ふと目にした、乾いた歯ブラシに涙する親心に心を打たれる。親子の契りの悲しさでしょう。半夏生はお子様の旅立の季節を俳句に詠まれたのでしよ

う。心に沁みる句でした。

森山秀子選

《17・34・41・43・93・130・158・159・163・178》

原田勝子選

《16・61・62・69・86・124・126》

16 つま立ちて孫見送りぬ秋の暮

(立麻琴路)

つま立ちて孫見送りぬと表現が面白くマツチして久しぶりに来られた可愛いお孫さんの姿が見えなくなる迄手を振り乍ら別れを惜しんで寂しくも感じられる光景が目に見える様です。

甲斐順子選

《17・18・30・31・49・54・68・75・101・108》

畑正彦選

《10・59・61・69・90・124・126・131・179・181》

赤峰佐代子選

《9・13・30・31・56・60・76・131・143・164》

伊藤利恵選

《79・86・107・108・109・110・120・135・138・192》

鎌倉真由美選

《8・9・30・56・63・86・109・153・164・191》

56 湯豆腐をつつきこのごろ人嫌い

(上田たかし)

コロナのせいでしょうか。この頃、気持が快とならず、知人を見かけても会話することが面

倒で気付かぬふりをしたり。(私の場合)

食欲も気持に比例するのでしようか。すつと飲みこめる湯豆腐さえ、はしが進まずついついばかり。おしゃべりな私が人嫌い? いやきつとコロナのせいでしょう。

園田 武子 選

《9・49・56・60・61・86・109・154・164・179》

岸本千鶴子 選

《31・43・72・79・84・95・106・164・177・192》

井上 則子 選

《10・13・19・30・59・69・72・109・164・177》

59 虎落笛平和のきしむ音かしら

(白土 正江)

戦争を知らずに生まれ、戦争のない世の中が当り前、と思いききて来て、最近テレビに写し出される戦禍の町、逃げ惑う人々。「春だ、花見だ」と平穏な生活を送っているこの時にも、と信じ難い思いです。世界情勢の不安と虎落笛の音、心に響きました

倉迫 順子 選

《17・32・58・74・105・107・108・153・182・189》

153 老ひという魔物に対峙秋の暮

(畑 正彦)

老いは魔物だろうか、魔物を辞書で引くと妖怪、魔性のもの、人を迷わすものとある。人間に生まれ、両親や周囲に慈しみ、育まれ勉学に威み、親となり、家族の為に懸命に働き、四苦八苦しなから、親の役目を終え、孫を慈しみ、

晩年は老いという魔物に対峙する。身体のうちこちで耐用年数が切れ、もの忘れがひどく、動きがスローモーになって、確実に老いは進んでいる。私は誰も通る道だから、楽しいことだけ考えて歩みたいと思う。

久枝 花城 選

《1・23・31・176・181・183》

1 菰卷や大樹に二人抱きついて

(長谷川正伸)

一瞬若い二人がふざけているのかと思うシーンをうまくとらえた。

23 海鼠腸のこの呼び方が私好き

(東 香代子)

なまこ、の三音を、こ、の一音に約してしまつて通じる日本後の大胆、玄妙さ。句としては、こ、の頭韻が利いている。

31 帰省子とひらがなのような日が過ぎる

(灘波 瑞枝)

平仮名のように変化の少ない穏やかな日々をすごす幸せ。

183 南瓜煮る母の背中の中

(菅 登貴子)

帰省した子のために南瓜を煮る老母の背中に見えるあふれる喜び、うれしさ。それに気付いた息子、または娘もうれしい。

佐藤 哲夫 選

《1・23・34・64・147・151・167》

167 ただ窓に雲見て暮らす秋の午後

(あべまさる)

雲を見ているとドラマがある。雷も雨も落ち

るが、雲は落ちない。人間はもし雲が落ちたらどうなるのだろうかと思いつながら、明日もひとり秋の雲を見る哀感胸に迫る句。

田中 充 選

《17・18・51・87・95・105・109・126・169・185》

95 山眠るコペルニクスのでのひらで

(平田千代子)

コペルニクスは、太陽系モデルの理論的考察に基づく地動説を提唱した。地球は太陽系の惑星にすぎず、ここで起こる諸事象は壮大な宇宙観を持つコペルニクスの掌中にあると言えない。「山眠る」は、数多ある事象の一つに過ぎない。この句の良い点は山とコペルニクスとの取合せにあり、発想の転換が秀逸である。なお、地動説を論じた大著は、天動説を信奉する当時のカトリック教会に配慮して彼の死の直前に刊行された。

河野 泉 選

《13・24・44・51・72・78・125》

谷川 彰啓 選

《17・28・33・51・104・109・126》

下司 正昭 選

《43・47・59・104・127》

127 開戦日百三歳の記憶聞く

(佐々木 玉)

掲句と同じ様な経験をした。それは五年程前体調を崩し別府市内で入院した時、同室となった卒寿の老人の戦争体験である。その人は珍珠の畜産農家の人で戦時中、少年兵として志願入

隊し、満州各地を転戦し満州の奥地モンゴル国境附近で終戦を迎えた。その後苦勞して村に帰つたら村から出征した若者16人のうち半分は帰つて来なかつたとの事であつた。その時彼がつぶやいた「今思うとつまらん戦争をしたもんじや」この言葉が今も私の心に忘れられず残っている。

御手洗豊海 選

《9・17・18・41・47・51・105・149・153・179》

井元 扇岳 選

《9・16・19・42・56・69・127》

時松由美子 選

《2・17・26・43・49・60・78・140・164》

※点盛と選評の作品番号は、編集部で作者順に変換して掲載しました。

令和四年 第2回 雑詠句会 選句用作品集

- 1 桜散る窓や抜齒のうがい水
- 2 春なのに出るはためいきコロナなり
- 3 銃口にペンは勝るや春の雪
- 4 信玄餅無念の甲斐や富士黙る
- 5 冬の蚊に肉体ありや神がいて
- 6 桐の花咲いて戦の続きおり
- 7 飛花落花遺影を飾る時来たる
- 8 言い訳をぐいと飲みこむ寒の水
- 9 兄ちゃんの辛夷咲いたか二度の地震
- 10 陽炎を追ってふるさと遠くする
- 11 雨の降る度ごと世界草萌ゆる
- 12 仏壇に自慢の西瓜見てもらう
- 13 愛猫は雀隠れに座して待つ
- 14 卒業の五十年後も友で居る
- 15 ほんだわらうねりにまかせ浜女
- 16 山藤や青蝶の舞ふ四季彩路
- 17 手編み物ばかりの遺品昭和の日
- 18 宿坊の御仏と寝る夏布団

- 19 上を向きちやんと歩こう花水木
- 20 診察の無口な先や冬怒涛
- 21 春昼や半額パンを半分コ
- 22 小春日に遠出もせず猫野
- 23 啓蟄や昭和を点す義母の帯
- 24 空蟬の秘かに残る記憶かな
- 25 紅梅の色に負けじと下駄鳴らす
- 26 竹の子の茶髪となりし売れのこる
- 27 家中の声を搦き込む草の餅
- 28 七十路の胸に小さき野火一つ
- 29 夢でなら会える亡き人麦の秋
- 30 味噌の濃き漁港の朝餉合歡の花
- 31 轉りや無骨な夫の片えくぼ
- 32 順番に桜のもとへかえりゆく
- 33 大地踏む竜虎の幟映は朝
- 34 ガランドヤ歴史古墳や風光る
- 35 春耕や土ふくよかに匂う時
- 36 母の日の蕾で届くクレマチス

- 37 サスペンス映画の佳境目借り時
- 38 生れるも死するもさだめ大銀河
- 39 死ぬな負けるなキーフの民よ雪解道
- 40 春の声別府温泉産湯かな
- 41 砲火砲音童話の里に飾る武具
- 42 巢燕に賑はひ託すシャッター街
- 43 人間を休み長閑や入院す
- 44 連休の家族写真のお年玉
- 45 一筆箋届きますよう花筏
- 46 さくらんぼ上げる子もなく過疎の村
- 47 画布に炎える紅薔薇傘寿なる
- 48 故郷の土手は今頃犬ふぐり
- 49 春愁やハツと目覚めて苦笑い
- 50 少年の手足長かり冬の道
- 51 かけ出してもかけ出しても青い空
- 52 ひっそりと春を動かす大吊橋
- 53 グランドに1オクターブ子等の秋
- 54 昼寝して遅日の庭で草むしり
- 55 いちめんの菜の花旅に出よと言う
- 56 花おわる樹にやわらかき乳房かな
- 57 花の雨はるかにロシア、ウクライナ
- 58 風船のメッセージ遙かウクライナ
- 59 告げもせず告げられもせず花菜道
- 60 菜の花の隙間に伊方発電所
- 61 制服が光をはじき入学す
- 62 アネモネのやけに明るき退職後
- 63 制服ですました孫を壁に貼る
- 64 もう一度紙風船と置き薬
- 65 日出生台憲法九条加え春
- 66 入学のひかりの中の吾子を追う
- 67 微笑めばほほえみ返す桜五分
- 68 春光やマザーテレサのホスピタル

69 目覚めれば笹鳴く声は亡き子かも
70 鏡見てマスクはずせばシワ増えし
71 菜の花の沖に夕日を閉じこめる
72 忍野富士大盃若葉を併せ呑む
73 さくら散つて無常迅速ウクライナ
74 ウクライナの戦いつ止む風知草
75 春光や先輩卒寿ピアノ弾く
76 縄跳びの少年風になる途中
77 茎立ちや戦火の中で産まれし子
78 春愁や溜息ばかり父に似て
79 散椿集め華やぐ花手水
80 秋晴れや旅行かばんを捨てに行く
81 鹿威し夜明けの静寂に時刻む
82 廃屋をまた埋めてゆく諸葛菜
83 名水の甘さ高まる女郎花
84 董鉢ヴェージュの蛙ボンジュール
85 寂しさとう頑固のひとつ冬の岩
86 夏場所を父に奮発溜席
87 色を足す画家のパレット春が来る
88 春寒や生かさされ幸せ四苦八苦
89 記憶力妻の勝ちです春うらら
90 再びの生命つないで茄子を煮る
91 白梅の幹の愁いを数えけり
92 農作業愛しむ母の秋日和
93 子雀よそこは私の通り道
94 水ぬるむ少しきつめの名古屋帯
95 春愁や余生がしほむ疫病の世
96 春愁を掃いて集めて燃やしをり
97 八月を支え切れない仁王かな
98 まだ残る肌のぬくもり走り梅雨
99 いのちなき風船だからすぐ逃げる
100 うすものやすつからかんにあかるい夕陽

101 春の野や子どもガイドの声弾む
102 菜の花や果ては大河の筑後川
103 頬なでる風はみどりに蕨摘む
104 二度とない今日一日や春落暉
105 早口の会議始まる雀の子
106 陽炎の父の背中が遠ざかる
107 ネオナチの悪の権化や春の闇
108 庭下駄をつつかけて聞く初音かな
109 黄蝶群るる獄門原の殉教図
110 四月来ぬ吾子ゐし部屋の広きかな
111 麗かや戦う国も同じ空
112 葉桜の呼ぶ風となる高校生
113 陽炎に巻かれて絆ほころべり
114 キヤラブリキを作る一日は子孝行
115 嬰兒の乳の匂いや緑立つ
116 ゆく春を夫婦二人で惜しみけり
117 なにやかやあれやこれやの初節句
118 ジグザクと鼓動をきざむ逢始
119 保健所の窓の外にも影映す
120 石蹴つて聞く早春の川のおと
121 花愛でて熟女五人の酒五合
122 畦道に立つて雲雀の舞い仰ぐ
123 春の雷ふしぎな夢を見ていたり
124 うりずんの岬に向けて馬放つ
125 ウクライナの戦火テレビに菜飯食む
126 菜の花や猫の浮気も週刊誌
127 沸点の低き連れ合ひ山笑ふ
128 淋しくてもう風船になつて
129 囀を抱いた小枝を生けてみる
130 夕昏れは思わせぶりな檜若葉
131 菜の花の黄色の圧力春深し
132 菜の花の黄色いろいろ絵画展

133 更衣葉の量ならまず負けぬ
134 花の雲旅立つときは杖捨てて
135 葉桜の下で来し方考える
136 春光や手摺に朝の埃浮く
137 無常とは美しきかな花吹雪
138 娘と孫朝の化粧競い合う
139 戦火呑む入道雲の喉仏
140 いくたびも見返る富士や春霞む
141 捨てマスクありて枯野はまだこの世
142 万緑の中へ初孫呱呱の声
143 銅像を柔らかくして八重桜
144 鉛筆の先より春の深まりぬ
145 風光る石仏の手に塩むすび
146 ど忘れの文字と向き合う蝶の昼
147 ありがとう今更妣に秋の暮
148 百年の家より高くこいのぼり
149 老松の羽交締かな菰の巻
150 陥落のクレミンナにも夏つばめ
151 秋蝶の山にもどりて人を恋う
152 青き星憤り哀しみ飛花落花
153 あっさりと裸木でいる齢かな
154 苺買う草冠の母を買ふ
155 オムライスパセリは平和の証なり
156 ハンカチに悲喜こもごもを折りたたむ
157 磨崖仏縁にすがる藤の花
158 相槌をうつ相手なく冷奴
159 のどけしや余さず使う鎌の音
160 幸福を集めし空の小春かな
161 白き息豊後の山にふきかける
162 長雨やここで角出せ蝸牛
163 白牡丹崩れて庭の夜気重し

164 細身のスーツかぎろいてゆく東京便
 165 目的地どこかあるらしなめくじり
 166 パンデミック群れて騒ぐな寒鳥
 167 地に遊び風に遊ばれ春の色
 168 おとしぶみ封をきられぬまま遺品
 169 果てのない戦を見つつ春の宿
 170 ウクライナ空が泣いてる春の雨
 171 さじ加減豌豆ごはん塩加減
 172 隣国の舵取り無情麦の秋
 173 自転車の補助輪外す花ミモザ
 174 みどり児の笑顔まぶしき若葉風
 175 古都の春戦禍の遺体は放置され
 176 おふくろが孫と競争風信子
 177 歳よりも葉増えゆく半夏生
 178 またひとつ歳をかさねて花は葉に
 179 麻酔覚め春はあけぼの賜りぬ
 180 田水取る賑ふ昭和や豊かなり
 181 点滴の雫を揺らす吹き流し
 182 花冷えや子の元へ発つ友愁う
 183 八月の空鶴を折る葉包紙
 184 春の朝小豆パンにて満腹に

185 猪と真剣勝負淡竹の子
 186 木の芽晴膝のかさぶた剥いでみる
 187 眠たさが朝のあかりに答えけり
 188 蟻が這うドームは今も爆心地
 189 老女と言え三寒四温立ち向ふ
 190 残る鴨飛び立つ前の身支度を
 191 立春の光を入れてジャムを煮る
 192 方言をまる出しにする立夏かな
 193 我もまた宇宙のひとつ犬ぶぐり
 194 若葉泣く砲撃音の日出生台
 195 戦争がそこに来ている若葉寒
 196 七輪をはみ出て鯖が焼き上がる
 197 膳の鯖ニュースを眺め箸を止む
 198 手をつなぐその指先に若葉風
 199 筍が皿が立派でかしこまる
 200 風船の肺活量でシャボン玉
 201 落書きを砂に残して春逝けり
 202 更衣して二の腕をあざとくす
 203 杖を置き青葉若葉の中をゆく
 204 月朧犬遠吠えているばかり

(以上)

204句から10句の選句をお願いします

◆第2回雑詠句会には68人の会員から204作品が寄せられました。この中から10句を選び、7月15日(金)消印有効で事務局にお届けてください。消印有効とは3、4日のゆとりがあるということです。

◆同封の選句用紙を使うと、どこコンビニのファックスでも50円で送れます。自宅のファッ

クスでも、もちろんOKですが意外とメンテナンスができていないことが多いようです。メンテナンスをきちんとお願いします。

◆新会員が多くなっています。遠慮せずにごんどん投句や選句、選評を行ってください。当協会では会員全員に作品の提出だけでなく、選句・選評のチャンスを提供します。選句も最初

は時間がかかりますが、慣れればもっと短時間でもっと深く味わうようになれます。いくら才能があっても、数をこなして慣れることは絶対に必要です。

◆第32回現代俳句大会に応募した会員は、自動的に会員選者になってもらっています。これも雑詠句会と同様に会員に実力をつけてもらうためのもので。すでに新会員からも選句が続々届いており、「632句から20句を選出するのは思ってたより大変だったが、勉強になった」などの声が寄せられています。

 **大分県現代俳句協会**
 OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志

《事務局》
 〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436
 足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481
 URL: <http://www.gendaihaiku.net>
 E-Mail: info@gendaihaiku.net

